

平成17年度 農林水産試験研究 事後評価結果

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	総合評価	コメント
1	農総研	うまい・きれい石川米生産技術確立研究	H13～16	食味に加え外観品質も向上させる「うまい・きれい・石川米づくり運動」を支援するため、品質の低下原因となっている乳白粒や胴割れ粒の発生を抑え、粒ぞろい（整粒歩合）を向上させる技術を開発	A	・実際に多くの農家で実証され、そこで成果を上げてこそ本物の研究と言える。期待している。 ・石川米づくりの技術（うまい・きれい）は十分に達成され、これからは楽しみ。 ・今後とも農家へのいっそうの普及を図って欲しい。 ・石川のブランド米が作れないか。このテーマが石川県で一番大切な目標ではないかと思う。
2	農総研	持続的水田輪作体系に向けた大豆・大麦の安定生産技術の開発研究	H12～16	半湿田・湿田における大豆・大麦の収量・品質を安定させるための排水対策や大規模栽培に対応した施肥・防除技術の確立。平成12年度に大量発生した大豆青立ち症状の防止技術の確立。	B	・目的は明確で成果が得られた場合は効果も大きい。農業が持続的によい形で続いていくべき方法としてこれらを現実の農業に着実に啓蒙し、形として運営まで指導して欲しい。 ・安定生産に結びつく成果として評価したい。 ・大豆の無人ヘリ防除、全量基肥施肥の効果は技術的に定着。大豆青立ち症状の原因解明に役立つだろう。 ・大麦だけでなく小麦（石川産小麦・有機ならなおいい）の使用も増える可能性がある。
3	農総研	石川型花壇苗生産技術研究	H12～16	花壇苗生産者の用土の実態を調査するとともに、安価で入手しやすい材料を用いた多品目に使用可能な育苗用土を開発。夏季育苗時の徒長苗の防止技術を開発するとともに積雪地帯に向けた宿根草品目を選定。	B	・今後益々リサイクル運動が本格化すると思われる。次から次へと新しいものを使用するのではなく、粉砕粗殻等の費用のかからないものを商品化する技術は非常に重要になってくる。 ・期待したい課題であり、実用化に目途がたった床土は評価したい。開発普及が望まれるフィルムについては今後期待したい。 ・安価な育苗用土は今後ますます普及して欲しい。 ・今後花の需要の伸びが見込めるので、普及に努めて欲しい。
4	農総研	低コストフルオープンハウスの開発・利用技術研究	H14～16	積雪にともなうフィルムの被膜・除去作業を不要にするとともに、夏場のハウス内温度を低下させ、作業環境の改善や品質向上を図るため、既存ハウスを簡単にフルオープン化（全天候開放型）する手法を開発。	B	・台風等の強度、コスト面を再考する必要あり。 ・野菜ハウスは周年利用が必要であり、現場では妻側窓や天窓等の附属資材を活用しているため投資意欲は薄いのではないかと。ブドウハウスにはgoodと思われる。 ・既存のハウスを使って安価に利用する技術は評価できる。 ・強風対策さえ取れば、普及は進むと思われる。昔のビニールと違い耐久性が高まっているので長期間ビニールを使用することがこれから求められる。
5	農総研	ぶどう新品種の多用途販売に向けた商品性開発技術の確立研究	H14～16	観光ブドウ園に適した、赤色系ブドウ（安芸クイーン）のもぎ取り用の整枝・選定技術を開発。直売に適した贈答用詰合わせブドウの果房整形・無核化技術及び減農薬の防除技術を開発。	B	・農業が人体に及ぼす影響は想像以上に大きいことは周知の事実である。ぜひここでの研究を広くしかも深くされて、地域環境を少しでも美しいものにするための研究を欲しい。 ・微生物農薬や性フェロモン剤の利用によって、化学農薬の散布回数を減らしたことは評価できる。
6	農総研	金時草など県産特産物の機能性成分活用技術の確立試験研究	H14～16	高い抗酸化作用がある金時草赤紫色素を周年供給する方法を確立するとともに色素を利用した食品を開発。金時草以外の加賀野菜についても、機能性成分を検索し、それを活用した食品等を開発。	A	・実際の実用化にもつと努力して欲しい。 ・地産地消のメニューとして活用が期待できる。成果を生かすには対象作物の生産振興拡大がキーとなる。 ・長期保存が可能で、赤紫色素を効率的に抽出できる金時草乾燥葉の製造法の開発は非常に評価できる。 ・評価結果は低い期待の大きさが点数に表れたと見て欲しい。天然色素は是非欲しいがまだまだ価格が高すぎる。低コストの天然色素の開発は大きいと期待される。
7	林試	アテ漏脂病被害対策事業	H14～16	アテ漏脂病・枯死症状の発生機構の調査、追跡調査による被害の発生特性の把握、施業試験の実施他	B	・実際どのくらいの割合でこのような病気が県産木に及んでいるのかがつかめていない。早急にそのことを調べてみる必要あり。 ・能登ととれる珪藻土をアテ漏脂病に適用して見ては。 ・今後とも原因の究明に努めて欲しい。
8	林試	県産スギ、能登ヒバの材質性能データの拡充整備	H15～16	県産材の建築用材としての基本性能として、県産スギ柱の圧縮強度および能登ヒバ土台材の横圧縮強度の測定	B	・もっと広報の必要あり。民間にもっと知らしめるべき。 ・さらなる材料強度の改善、寸法変化が少ない等の技術開発として、遠赤外線効果を検討して見てはどうか。 ・県産材の良さをもっとPRして欲しい。
9	林試	自然素材を用いた保護処理木材の性能評価	H14～16	柿渋、漆、弁柄など日本在来の天然成分由来の塗装性能の定量化。表面性能試験、屋外曝露試験、促進耐候性能試験。	B	・アスベスト被害等、壁などの塗料のシックハウス症候群に見られる害は社会問題になっている。ぜひ広報と広く実用化に向けて一層の努力を。 ・自然素材塗料の見直しに柿渋の利用を入れたことは評価できる。 ・外装材としての需要の拡大が期待できる。
10	林試	施設栽培きのこの品質向上に関する研究	H14～16	ナメコの褐変防止技術の開発 カキ殻添加培地におけるナメコの発生量ときのこのカルシウム含有量を調査 シイタケの保存温度が品質に与える影響を調査	B	・県産ナメコの普及率が大きければ大きいほど研究成果の結果の貢献率は大きい。一日も早い普及を！ ・ナメコ、シイタケに対して鮮度保持、収穫量の増の開発技術は評価できる。 ・鮮度保持の研究はいつの時代も大切なテーマである。カキ殻利用は廃物利用として優れている。もっとカルシウム含量が上がるとブランドナメコになれると思う。
11	水総	外来魚の駆除と生態系の保全に関する調査研究	H13～16	外来魚（3種）の生態解明と県内における生息状況等の把握	B	・外来魚の脅威は石川県のみならず全国でも大きな問題となっている。徹底した研究を今後もぜひ継続して欲しい。日本古来の魚が一匹もいなくなる前に。 ・外来魚（バス類）の生態を明らかにしたことは評価できる。 ・外来魚といえども、県内に定着しだしたのなら、そのことを自然の一部として受け入れるべきなのかもしれない。
12	水総	定置網漁具に被害を及ぼす急潮発生メカニズムの解明に関する研究	H12～16	急潮の発生メカニズムと予測技術を開発	A	・被害については生計に関わる重要な問題であるので、原因を解明できたことは大きな評価を得られるものと思う。後はどれだけ早く正確に予想を立てられるかであると思う。研究を続けて欲しい。 ・急潮発生原因の解明をしたことは、定置網漁具の被害を予防することに對してすばらしい成果と評価できる。

【総合評価】

A :  
B :  
C :

1.1以上  
6以上  
6未満

予想以上の成果をあげた  
当初の目的をほぼ達成した  
目的の達成は不十分であった